

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.217 2018.7.1

平成30年5月20日



市民学芸員養成講座が開講されました

5月20日(日)、博物館と共に地域の文化財に対する学習・調査や、博物館の普及公開活動を行う人材の育成をめざし、15人の受講者と第7期市民学芸員養成講座を開講しました。午後からの基調講演「成熟社会の博物館 サポーターからプレイヤーへ」では、東京都文化財団事務局企画担当課長の佐々木秀彦氏から、今後の活動への様々なヒントにあふれたお話を聞くことができました。今後1年間、松本まるごと博物館構想の実現をめざして共に学んでいきます。

もくじ	誌上博物館	◇ 旧開智学校校舎は見よう見まねか……………2
		◇ 城下町松本のにぎわい 一町人地における人々のくらし……………3
		◇ ホリガサと高遠石工 一松本藩領における高遠石工の活動……………4
	博物館TOPICS	◇ 夏季企画展情報……………6
	ガイドコーナー	◇ はんでんぼく……………8

美しく生きる。
健康寿命延伸都市・松本

旧開智学校校舎は見よう見まねか

1 はじめに

7月から開催する企画展は、近年の研究の成果をもとに、重要文化財旧開智学校校舎に関する謎の解明を試みる展示となる予定です。

旧開智学校校舎は、擬洋風建築の代表作といわれています。擬洋風建築とは、幕末から明治前期にかけて、西洋建築と日本の伝統的な建築が混ざり合いながら誕生した和洋折衷の建築です。牛鍋やアンパンと同様に、日本の職人が洋風を取り込みつつ独自の表現を創りあげた点から、文明開化を体現した建築と評価されています。しかし、名称に「擬」がつくように、各地の大工棟梁が見よう見まねで造った建築というようなマイナスイメージも持っています。

そんな擬洋風建築の代表作である旧開智学校校舎は、見よう見まねで造られたものなのか、それとも意図的な表現であったのか。今回の誌上博物館では、企画展のテーマの1つである“見よう見まね”について考えてみます。

2 旧開智学校校舎の設計にみえる意図

旧開智学校校舎を設計施工した立石清重は、校舎の設計にあたり、東京や横浜といった洋風・擬洋風建築の先進地へ見学に行き、スケッチ等を行いながら新しい建築を学んだことが有名です。実際に校舎の各部に、見学してきた建築の要素がミックスされています。また、エンゼルと竜の彫刻を中心とした車寄の表現は唯一無二といわれ、立石オリジナルの表現も存分に発揮されています。しかし中には、目地の揃っていないコーナーストーンの表現や、人が

出ることを意識していないバルコニーの造りなど、見よう見まねといえる箇所も散見されます。

こうした様々に引用・折衷された表現の中で、立石の意図がはっきりと表れているのが、校舎内の装飾された扉の配置です。校舎

内には、ペンキによる花の装飾が施された洋風の唐戸と浄林寺から転用した和風の棧唐戸、ペンキで塗りつぶしただけの扉の3種類があります。これらの扉の配置は明確に使い分けられています。

洋風の唐戸は、来賓や教員が使用する校舎正面前出入口から式典などを行う講堂に至る動線上に集中しており、外部の大人の目に入る場所に洋風の装飾を施したとみることができます。対して、和風の棧唐戸は生徒昇降口と講堂から教場へと出ていく箇所などに配置されています。まるで、外部の大人たちにこの先は生徒のスペースであることを暗示しているかのようです。生徒昇降口の棧唐戸の彫刻は校舎外側に向かってつけられ、講堂周りの棧唐戸は彫刻が講堂の方を向いていることもその証と考えられます。その他の扉はペンキで塗りつぶされただけのシンプルな扉です。こうした扉の配置方法から、立石は、外部の人間の目に入る個所に重点的に洋風の装飾を施して文明開化の実現をアピールしつつ、教場スペースとの境には和風の棧唐戸を配して、意匠によるスペースの区分までも実現したとみることができます。

このように、立石はかなりの程度、洋風・和風の意匠を使い分けていたと考えられます。そうでなければ、エンゼルと竜の彫刻をはじめとしてふんだんすぎるほど盛り込まれた擬洋風の要素を、全体のバランスを崩さずにまとめあげるといふ離れ業は実現できなかったでしょう。こうして、高い独創性を持った旧開智学校校舎は“見よう見まね”という言葉だけでは言い表せない、立石による新たな表現の創出が行われた建築といえるのではないでしょうか。

3 おわりに

企画展では、今回の“見よう見まね”という問題以外にも、旧開智学校校舎が松本に誕生した理由や、全国の学校校舎と比べてどれだけ優れていたか、といったテーマの解明にも取り組む予定です。校舎と展示を見ながら、校舎に関する謎について一緒に考えていただければ幸いです。

(重要文化財旧開智学校校舎 / 遠藤正教)



浄林寺から転用された棧唐戸

企画展「旧開智学校校舎誕生と立石清重」

[会 期] 7月14日(土)～9月17日(日)

[会 場] 旧開智学校校舎 展示室

[料 金] 通常観覧料 (大人 300 円、小人 150 円)

城下町松本のにぎわい—町人地における人々のくらし

松本城天守イメージの強さ

天守を現代に伝える城は全国でわずか12城であり、なかでも松本城は国宝5城のひとつとして国内外を問わず広く知られています。また、日常風景の一部となっている松本城は、市民にとっても松本のシンボルであるといえるでしょう。

しかし、現存する天守が有名であるあまりに、今の姿にとらわれて江戸時代の松本城を考えてしまうくらいがあります。実際、藩主は天守で日々の生活を送り、政治を執り行っていたと思われている方も多く、建物が残っていない本丸御殿跡や二の丸御殿跡への関心は、それほど高くはない印象をうけます。

松本の城下町

話が城下町となると、江戸時代の様子を想像するのは、さらに難しくなります。そもそも城下町という言葉自体がぼんやりとしていて、城の近くを示す便利な表現として使われることが多い気がします。しかし、城下町は、ぼんやりと出来上がった都市ではなく、明確なプランに基づいて設計されていたのです。



松本城下町初市のにぎわい(『善光寺道名所図会』より)

松本城下では、女鳥羽川(中心市街地を流れる一級河川)を境にして、城の北側に家臣の住居が集められ、川の南側には商人や職人の暮らす町人地が設けられました。そして城下町の外縁部には、有事の時の空間確保の意味から寺や神社が置かれ、計画的に町の配置がなされていたのです。

また、城下全体にも様々な工夫が凝らされました。堀や土塁を築いたり、河川を巧みに都市計画に取り込むことで防衛力を高めていました。道路も複雑なT字路や食い違いとするなど、意図的なつくりをしていたのです。

このように、松本の城下町は配置や区域、構造などが緻密に計算されていました。その名残りは現在の街並みや町名、伝えられてきた史料、発掘の成果などから垣間見ることができます。

江戸時代=武士ではない

松本城下には、どれ程の人がくらしていたのでしょ

うか。宗門改帳や戸田家中に関する史料などから江戸時代中期以降の概数を見てみましょう。

統計的にみると町人の人口は、約8,000～9,000人で推移していたようです。一方、武士の人数ですが、文化12年(1815)、藩主戸田氏のもと、松本には約1,000人の藩士がいたことが分かります。そして、藩士には家族があり、彼らが約5,500人あまりと推定されています。ちなみに宗教関係者は300人程であったようです。これらのデータから、おおよそ15,000人前後という数字がひとつの目安となります。

ここで注目したいのは、城下といっても、武士以外の人々が多く生活をしていた点です。支配者層は刀を差した武士ではありましたが、城下町では武士ではない多くの人々の営みがあり、またそうした人々によって武士の仕事やくらしも支えられていたのです。

町人地の人々

城下町の大半を占めた武士以外の人々はどのような生活をしていたのでしょうか。

彼らが住む町人地には、町ごとにそれぞれの特色がありました。例えば、本町には問屋、東町には旅籠、博労町には博労(牛馬の仲買人)、鍋屋小路には鋳物師(鋳造職人)といったように同業者が集まりながら、町を形成していました。

「松本市中記」は18世紀初めの城下の様子を記した興味深い資料ですが、ここには職業の種類と人数が記されています。上位5つの仕事を紹介すると、豆腐屋80人、桶屋60人、綿打屋(綿をほぐす仕事)56人、酒屋54人、味噌屋47人となります。他にもまんじゅう屋、古道具屋、目薬売などが見え、人々のバラエティに富んだ生活模様がうかがえます。江戸時代の松本城下では、多彩な人々が生活を営み、城下町のエネルギーを生み出していたのです。

この度開催する「城下町松本のにぎわい—町人地における人々のくらし」では、当館所蔵の資料や発掘資料などを通して、松本城下の町人たちのくらしを紹介します。城下町に活気と彩りをもたらした町人の世界をお楽しみください。

(松本市立博物館学芸員/高山 直樹)

企画展「城下町松本のにぎわいⅠ」

【会期】7月28日(土)～9月30日(日)

【会場】松本市立博物館2階 特別展示室

【料金】通常観覧料(大人200円、小人100円)

ホリガサと高遠石工

—松本藩領における高遠石工の活動—

はじめに

「ホリガサって何？」

多くの人はそう思ったことでしょう。ホリガサは、入山辺三城の堀ヶ沢から産出する石材で、軟らかい石質が彫像に向いています。松本城の石垣にも多くの山辺石が使われていますが、こちらは里山辺の湯之原から藤井にかけての山麓から産出する「山辺の青石」と呼ばれる硬い石で、建築材として使用されます。

本稿では、この山辺石のうち、ホリガサと呼ばれる石材と松本藩領の高遠石工の関係について、私見を述べてみます。

1 高遠石工の請宿

『松本市史』第四巻「旧市町村編」Ⅳに、貞享4年（1687）6月29日付の、中町の彦兵衛らが中入村の庄屋戸右衛門らに宛てた請合証文が掲載されています。この証文は、八兵衛と甚左衛門という2人の高遠石工の身元を、宿請人である中町の彦兵衛らが証明するために記したものです。2人は、高遠石工の名工として知られる守屋貞治を輩出した藤沢村の出身者です。証文には「先年も御請合ニ罷立ニて、山家之内ニて細工仕候」とあり、貞享年間以前から、高遠石工が山辺で石の細工をしていたことがわかります。

では、なぜ中町の請宿が紹介した石工が、山辺で細工を行っていたのでしょうか。それは、山辺が優れた石材の産地だったからだと考えられます。

城下町の東、餌差町の放光庵にある寛文9年（1669）造立の石地蔵を松本市の文化財に指定する際、その石材の産地を調べました。胡桃沢勘内は、この石材は根府川石ではないかと書き残しています。それは、石地蔵に刻まれた「施主生國相昴根府川廣井作（次）兵衛」という陰刻銘から推測したものとされます。勘内は、広井家が小田原で根府川石をもって幕府に仕えた家柄だったことを知っていたのでしょう。

この石地蔵には、もう一人「當東町河上又

衛門」という施主の名前が刻まれ、「此石從當町中出」とも刻まれています。しかし、東町でこのような大きな石材が採れるとは思えません。そこで、勘内は、東町の人々が経費を負担して、根府川から石材を仕入れたと考えました。

平成27年に、放光庵を建て替えるため、この石地蔵を移動することになり、餌差町の大槻石材店が作業にあたりました。そこで、この石地蔵の石材はどこの石か伺うと、大槻治仁さんは即座に「この石はホリガサだ」と断言されました。地元の石工さんの話だけに、説得力がありました。

先の請合証文と、この石地蔵に刻まれた「此石從當町中出」という文字から推測すると、寛文年間にはホリガサを扱う高遠石工の請宿が、東町にあったのかもしれません。

2 ホリガサという石材

このホリガサを用いた石造物はほかにもたくさんあります。放光庵の六地蔵、大安楽寺の六地蔵、玄向寺の六地蔵などは古い作例です。造立年がわかる例もあります。玄向寺の水野家廟所の五輪塔がそれです。

水野氏時代の藩撰地誌である『信府統記』（享保9年・1724成立）の「信濃国郡境記五 岡田組山川地理附女鳥羽ノ事」の項に、「忠職公此地ヲ見立テ、女鳥羽ト名付ラレ當家ノ廟所トスヘキ志願アリシ故忠職公卒後寛文九年忠直公其志ヲ繼キ眞珠院殿道樹院殿ノ五輪及ヒ石ノ鳥居ヲ建ラル此地ニ昔ヨリ道心者ノ住セシ庵室アリシヲ請ヒ受ケ之ニ廟所守ノ僧ヲ置キ上昌山玄向寺と稱セラル」と見えます。要約すると、水野忠職が浅間村の南の地の山の冷水を見立てて女鳥羽と名付け廟所とすることを望み、忠職が亡くなると、翌寛文9年に忠直が祖父忠清・父忠職の五輪塔と石の鳥居を建て、道心者の庵を譲り受けて廟所守の僧を



放光庵の石造延命地蔵菩薩立像



水野家廟所の五輪塔

おき、玄向寺と号したということです。

先の請合証文の最後に、「御家中様之御細工ハ不及申上ル」とみえ、高遠石工が藩主の仕事も請け負っていたことがわかります。この証文が記された貞享4年当時の藩主は、女鳥羽山の廟所に五輪塔を造立した水野忠直です。玉垣内の南端が祖父忠清、南から3番目が父忠職の五輪塔で、まさに「御家中様之御細工」に当たります。

忠直が玄向寺を開基した寛文9年に、放光庵の石地蔵が造立されたのは偶然なのでしょう。ほかにも、寛文9年に造立された石造物は、今井の正覚院に名号塔が1基、井川城の広正寺に涅槃の日を刻んだ名号塔が2基と「念仏講衆」が建てた名号塔が1基確認されています。松本市内で石造物の建立が盛んになるのは、元禄年間のことからで、全体的にはまだまだ石造物の少ない時期なので、特別な理由があるように思われます。このことについては、機会を改めて考えてみたいと思います。

3 石材の運搬

『信府統記』に見える寛文9年造立の「石ノ鳥居」は、廟所の石段の下にあります。この時代の松本において、このような大きな石鳥居を建立できる技術は、高遠石工を置いてほかにないと思われま

す。先日訪れた土岐市の妻木八幡神社にも、高遠石工の手になる石鳥居がありました。水野家廟所のものより1世紀ほど後の建立ですが、その



水野家廟所の石鳥居

作業日誌が残されているそうです。黒田正直禰宜のブログによると、「石切場で加工をして、八幡神社まで1500mほどの距離を」40人余りの人足を動員して、「5回に分けて石を引い」たそうです。堀ヶ沢から水野家廟所までは、直線距離でも10キロメートル近いので、1日に40人を動員したとしても、廟所まで運搬するのには1カ月以上かかったと思われます。

石材を運ぶのに用いる道具は、修羅と呼ばれる木製のそりです。その修羅が、里山辺の兎川寺

と八坂神社の境内に保存されていることも、山辺が石材の産地だったことを示しています。

旧『松本市史』下巻に記す各町の特徴のなかに「一鍛冶町石工」とあります。『信府統記』によると、この町はかつて紺屋町と呼ばれ、後に鍛冶町となり、編纂当時には山家小路と呼ばれたそうです。この町名も、石材の産出と関係がありそうです。



八坂神社の修羅

このように、「山辺の青石」と呼ばれる硬い建築石材も含め、良質な石材が山家組から切り出され、鍛冶町へと運ばれてきたのです。こうした石材の流通は、遅くとも江戸時代中期には始まっていました。大正7年には、石匠組合の前身が堀ヶ沢を山買い（石切の権利を買うこと）した記録が残されており、運搬具こそ変わったものの、戦後までこうした石材の流通がみられたようです。

おわりに

『まつもとの石造文化財』解説編によれば、旧松本市内の高遠石工の作品は21件確認されていますが、そのうち15件が入山辺をはじめとする東山部に集中しています。造立年が刻まれたものとも古い例は入山辺の宮原神社の石灯籠で、元文3年（1738）に「片倉村 石屋源蔵」によって造立されたものです。少し下って、天保15年（1844）に造立された入山辺中村の道祖神には、「石工藤森吉弥一寿工之 宮村石工文四郎作之」と2人の石工の名前が刻まれており、この頃には石工の分業が進んでいたようです。

また、長野県史跡に指定されている山家城の主郭跡にある秋葉神社の祠の下に石臼が敷き詰められていることも、山辺で高遠石工が細工をしていたことと関係があるのかもしれない。

想像をたくましくすると、藩主水野氏が廟所を整備するために招いた高遠石工を、城下町の商人が宿請人となって斡旋し、石の産地である山辺で活動していたのではないかと考えられます。

（博物館長 / 木下 守）

旧制高等学校記念館 Tel.0263-35-6226

企画展「松高生が愛した映画展」

松本平の山脈に囲まれた町の学生たちにとって、映画は青春の糧でした。休日になると、新宿まで映画を見に行った学生や、お気に入りの映画を何十回も見た学生もいました。松高生がよく通った映画館には、電気館・開明座・演技座・松本宝塚劇場などがありました。松高生の生活の大部分が映画に関連のあるものであり、松高生と映画とは深いつながりがあるといえます。

今回の企画展では、そんな松高生が愛した映画について、松本高等学校 22 回理乙誌『でるですー 22』のランキングをもとに紹介します。ランキングによると、どの年代でも洋画が上位に挙げられて



たくさんの映画ポスターが貼られた寮の一室



電気館

います。例えば、昭和 7 年にはルネ・クレール監督の「自由を我等に」が 1 位にランクインしています。ルネ・クレール監督は、映画研究会の機関紙『角度』の外国映画監督ランキング 2 位の監督で、松高生からも人気がありました。映画監督についても企画展で紹介予定です。是非足をお運びください。

[会 期] 7 月 14 日(土)～9 月 24 日(日)

[会 場] 旧制高等学校記念館 1 階ギャラリー

[料 金] 無料 (常設展は通常観覧料)

松本民芸館 Tel.0263-33-1569

企画展「錠前・鍵がカギ 丸山太郎のかぎと金工展」

松本民芸館を創館した丸山太郎の収集品には金工品が約 360 点あります。そのうち錠前と鍵は 60 点ほどですが、たんすや手文庫、銭箱などについている鍵を含めると、150 点をこえます。

柳宗悦を師と仰ぎ、民芸を求めて全国を旅した丸山太郎には、行く先々に共感しあえる友人や知人がいました。それらの人たちとの交流から、太郎はものの選び方や陳列の仕方、しつらえなどを学びました。

また、若い作り手を育てるなど、まさに丸山太



半閉櫃 (ハンダジ) の錠 朝鮮半島



銅やかん (江戸)

郎が人と人、人ともものをつなぐキーパーソンだったのです。

錠前と鍵を中心に、丸山太郎が選んだ金工類の美しさと面白さをぜひご覧ください。

[会 期] 7 月 24 日(火)～12 月 9 日(日)

[会 場] 松本民芸館

[料 金] 通常観覧料 (大人 300 円、小人無料)

松本市時計博物館 Tel.0263-36-0969

夏期特別展「高岡コレクション展」

尼崎市に在住されていた高岡得三郎氏 (1933～2004) が収集された古時計等の資料 190 点余りを、ご遺族からご寄贈いただきました。各時計の製造国はアジア、ヨーロッパ、アメリカと多岐に渡っています。また、製造年代も江戸時代から昭和後期までと大変幅広いものです。

日本では、明治 6 年 (1873) の改暦により太陰暦から太陽暦へと改められ、国内で製造されていた和時計が使えなくなりました。そして、安価で性能の良いアメリカ製の掛時計が人気となり盛んに輸入されるようになりました。やがて、国内メー

カーもこれらの時計の機械・外観を模倣して国産時計を作るようになります。高岡コレクションは、当時のアメリカの 7 大時計メーカーの掛時計が全て揃っているのが特徴の一つです。当覧覧会では、ご寄贈いただいた様々な掛時計・置時計を展示し、各古時計の魅力・歴史等をご紹介します。



四つ丸掛時計



八角掛時計

[会 期] 7 月 21 日(土)～9 月 2 日(日)

[会 場] 時計博物館

[料 金] 通常観覧料 (大人 300 円、小人 150 円)

四賀化石館 Tel.0263-64-3900

四賀化石館夏休み企画「ヤベオオツノジカ」

ヤベオオツノジカは後期更新世に生息していた日本最大のシカで、およそ1万年前に絶滅しました。当時の日本を代表する大型哺乳類のひとつで、わが国固有の種類です。野尻湖ではナウマンゾウとともに多くの化石が産出しています。それらの化石とともに骨製ナイフ、石器などが発見されていることから、旧石器人がナウマンゾウやオオツノジカを狩猟し、食糧や道具として活用していたことがわかっています。

今回展示する全身骨格レプリカは、山口県から産出した胴体部分の化石と、群馬県から産出した角の化石などを中心に、複数の化石をもとに復元されたものです。

また、昭和31年に安曇野市明科から産出したオオツノシカの角の化石も展示します。これらは標高1,500mあたりに生息する針葉樹の木片と一緒に見つかり、これらの化石木片を用いて絶対年代を測定した結果、15,700年前という、最後の氷河期「ウルム氷期」の末期にあたることがわかりました。ウルム氷期には海水面が今より大きく低下して、日本列島が大陸と陸続きになっていたため、多くの動物たちが渡ってきたものとみられています。

ヤベオオツノジカ全身骨格レプリカ



【会 期】 7月20日(金)～9月2日(日)
【会 場】 四賀化石館
【料 金】 通常観覧料
(大人300円、小人150円)

四賀化石館夏休み3講座のお知らせ

①シカ角アクセサリ作り

【対 象】 小学生以上
【日 時】 ①7月22日(日) ②7月26日(水)
午前9時30分から11時頃まで
【内 容】 シカ角を磨いてパーツを作り、ビーズなどと組み合わせて、ネックレスやストラップを作ります。

②微化石モンスターを探せ

【対 象】 小学生以上
【日 時】 8月1日(水) 午前9時30分から11時頃まで
【内 容】 300万年前の砂の中から小さな化石を探し出します。

③化石クリーニング体験

【対 象】 小学校3年生以上
【日 時】 8月8日(水) 午前9時30分から11時頃まで
【内 容】 タガネとハンマーで石の中に隠れている化石を少しずつ掘り出します。

すべて会場は四賀化石館2階学習室、定員は20名です。
受講料は、①、③が500円(観覧料・材料費込)、②は無料(通常観覧料必要)です。

いずれの講座も、申し込みは電話で四賀化石館へ
※7月7日(土)午前9時から受付開始。定員になり次第終了

松本まるごと博物館連携事業 まつもとの七夕 2018

【会期】 7月1日(日)～8月12日(日) 【会場】 各館(博物館はまちなか展示を開催)

松本市立博物館	Tel.0263-32-0133
松本市はかり資料館	Tel.0263-36-1191
窪田空穂記念館	Tel.0263-48-3440
重文馬場家住宅	Tel.0263-85-5070

松本の風物詩～松本のまちを彩る七夕人形・笹飾り～

松本地方には、七夕人形を軒先に飾り、ほうとうやまんじゅうを供える全国でも珍しい風習が江戸時代から続いています。博物館では今年もまちなか展示を行うほか、博物館連携事業として4館で七夕人形の展示を行います。また、七夕の伝統食であるほうとうの試食や、七夕人形を作る講座もあります。

まちなか展示

松本駅から博物館までの中心市街地各所に、商店などにも協力してもらい、七夕人形や笹飾りを飾ります。

町屋で楽しむ七夕さま

蔵の町・中町で、城下町松本の伝統的な七夕の雰囲気が味わえます。

会 場 はかり資料館
料 金 通常観覧料(大人200円、中学生以下無料)

星に願いを

記念館や空穂生家で、松本の伝統的な七夕の雰囲気が味わえます。

会 場 窪田空穂記念館
料 金 通常観覧料(大人300円、中学生以下無料)※空穂生家は無料

古民家で楽しむ七夕さま

本棟造りの古民家で、松本伝統の七夕人形の情景展示をお楽しみください。

会 場 馬場家住宅
料 金 通常観覧料(大人300円、中学生以下無料)



七夕の縁側

関連イベント

ほうとうサービス



はじめて食べたほうとうの味は?

松本では七夕にきなこや小豆あんをあえたほうとうを食べる風習があります。この機会にぜひご賞味ください。※ほうとうがなくなり次第終了。

日 時 8月7日(火)午前10時～
会 場 市立博物館・はかり資料館・馬場家住宅
料 金 無料(ただし各館通常観覧料が必要)

市民学芸員による七夕人形作り講座

月遅れの七夕にむけて、色紙で簡単に作れる七夕人形を作ってみませんか。

日 時 8月5日(日)、6日(月)、7日(火)いずれも午前10時～
会 場 市立博物館
料 金 通常観覧料(大人200円、小中学生100円)

七夕人形作り講座

七夕人形キットを使って本格的な七夕人形を作ります。

日 時 7月8日(日)、8月7日(火) 各午後1時30分～3時30分
会 場 馬場家住宅
料 金 1,100円(材料費)及び通常観覧料

山と自然博物館 Tel.0263-38-0012

自然観察講座「バタフライガーデンをつくろう！」

バタフライガーデンとは、チョウの食草（食樹）や吸蜜植物を植えることでチョウを呼び寄せる庭のことで、その作り方を学ぶ講座です。チョウや草花の美しさだけでなく、チョウと植物の関わりやその多種多様さという、生物多様性の一端にふれてみてください。天気が良ければ博物館周辺のオオムラサキの観察も行います。

【日 時】 7月7日㊦
午前9時30分～11時30分
【会 場】 山と自然博物館 2階講座室
【対 象】 小学生以上、一般
【定 員】 15名
【参加料】 大人 300円、中学生以下無料



吸蜜するチョウ

自然観察講座「夏の自然観察会」

豊かな自然に囲まれたアルプス公園では、四季折々の生きものを観察することができます。山と自然博物館では年に数回、季節に合わせた観察会を実施しており、今回は生きものが最も活発になる夏の観察会です。身近な自然について見て・触れて・感じてみてください。

【日 時】 7月29日㊦午前9時30分～正午（雨天中止・小雨決行）
【会 場】 アルプス公園
【対 象】 小学生以上の子どもと保護者・大人一般
【定 員】 15名
【参加料】 大人 300円、中学生以下無料
※いずれの講座も申し込みは電話で山と自然博物館まで



ガイドコーナー はんでんぼく

※ 申込み・問合せは各館へ（山博を除く）

考古博物館から ☎0263-86-4710

第40回あがたの森考古学ゼミナール

今年は古墳時代をテーマに講演していただきます。

【日 時】 ①7月8日（日）、②7月22日（日）
ともに午後1時から3時
【会 場】 あがたの森文化会館会議室2-8
※公共交通機関をご利用ください。
【料 金】 各講200円
【定 員】 各講先着70名
【講 師】 ①「古墳時代・巨大墳墓が語るわが国の古代国家形成期とは」土生田純之氏（専修大学教授）②「松本平の古墳時代」直井雅尚氏（日本考古学協会会員）

どき土器！古代まるごと体験！

火おこしをはじめとする古代の生活を体験してみよう！

【日 時】 7月28日（土）午前10時～正午
【会 場】 考古博物館
【参加費】 無料
【対 象】 小学生（保護者の付添いが必要です。）
【定 員】 20人

山と自然博物館から ☎0263-38-0012

ジュニアフォトグラファーズ

～ココロに写った自然を、パチリ！～

環境政策課主催の「エコスクール」との合同開催です。詳しくは松本市ホームページの「環境教育情報」ページをご覧ください。

【日 程】 8月8日（水）
【会 場】 アルプス公園内
【参加料】 無料
【対 象】 小学生3年生～中学3年生とその保護者
【申込み】 上記ページ内の応募フォームより

旧制高等学校記念館から ☎0263-35-6226

第23回夏期教育セミナー

今回は「教養」に注目して講演会他を開催します。

【日 時】 ①1日目講演会：8月18日（土）午後1時～5時、②2日目研究発表会：8月19日（日）午前9時～午後3時
【会 場】 あがたの森文化会館本館2階 2-8
【料 金】 ①懇親会1人2,000円、②昼食代1人1,000円
※2日間を通して参加される方は、宿泊費込みで12,000円での申込みも可能です。いずれの場合も事前にお申込みください。

窪田空穂記念館から ☎0263-48-3440

将棋教室

窪田空穂生家を会場に将棋教室を開きます。

【日 時】 7月14日（土） 午前の部（入門コース）：午前10時～正午、午後の部（実力養成コース）：午後1時～3時30分
【会 場】 窪田空穂生家（窪田空穂記念館向かい側）
【参加費】 無料
【定 員】 約60名
【対 象】 小中学生（実力養成コースは大人も可）
【講 師】 プロ棋士4名

松本民芸館から ☎0263-33-1569

体験講座「子ども民芸教室」

子ども向けのものづくり体験講座、布を裂いて織る「裂織」と椅子作りの「木工」コースがあります。

【日 時】 7月29日（日）午前10時～午後3時
【会 場】 松本民芸館
【定 員】 各コース10人
【料 金】 500円（材料費）
【対 象】 小学校高学年以上
【講 師】 裂織：山賀照子氏、木工：竹下賢一氏
【持ち物】 昼食

歴史の里から ☎0263-47-4515

①親子はた織り体験講座

はた織り機を使って裂き織りの作品を作ります。

②親子草木染め体験講座

7月はバンダナ、8月はハンカチの藍染めをします。

③親子みすず細工体験講座

みすず竹を使って作品を作ります。

【日 時】 ①7月28日（土）、8月25日（土）
いずれも午前10時～正午、午後1時～3時
②7月29日（日）、8月19日（日）
いずれも午前9時30分～正午
③8月18日（土） 午前9時30分～正午

【会 場】 歴史の里
【料 金】 ①各1組1,000円、②各1組1,500円
③1組1,500円
【対 象】 小学生以上の親子2人1組
【定 員】 各5組
【講 師】 ①川上裕子氏 ②歴史の里 染めの会
③歴史の里 みすず細工の会

重文馬場家住宅から ☎0263-85-5070

お茶席の会

【日 時】 ①7月29日（日）、②8月26日（日）
午前10時～正午
【会 場】 重要文化財馬場家住宅主屋
【料 金】 通常観覧料（大人300円）
【流 派】 ①おしゃれ茶道の会（裏千家）
②松風の会（表千家）

布ぞうり作り体験教室

【日 時】 ①8月25日、②9月22日、③10月27日
いずれも土曜日、午前10時～午後3時
【会 場】 重要文化財馬場家住宅主屋
【定 員】 10名
【参加費】 各1,800円
【講 師】 秋山啓子氏

あとがき

松本まるごと博物館で扱う「モノ」は様々、時代も化石から現代まで！
これから夏休み、博物館には自由研究のテーマになるものもいろいろ！
親子で楽しみながら松本について学んでみてはいいかですか！

(H. S)

あなたと博物館 No.217

発行年月日/平成30年7月1日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL : <http://www.matsu-haku.com>
e-mail : mcmuse@city.matsumoto.lg.jp



印刷 川越印刷株式会社